

氏 名 小林 祥也
学位の種類 博士 (医学)
学位記番号 甲第498号
学位授与年月日 平成30年4月4日
審査委員 主査 教授 川内 秀之
副査 教授 磯部 威
副査 臨床教授 藤代 浩史

論文審査の結果の要旨

日本発の経鼻上部消化管内視鏡検査は、従来行われてきた経口法に比べ、被験者の咽頭反射が少なく、息苦しさなどの苦痛が少ない点で、忍容性の高い方法として評価されている。一方で、特有な偶発症として頻度は少ないものの鼻出血の危険がある。

申請者は、今回の臨床研究において、経鼻上部消化管内視鏡検査時の鼻出血の頻度と鼻出血を起こす危険因子について、詳細に検討した。さらに、抗血栓療法の有無と検査時の鼻出血の関連性についても検討した。

本研究は、2014年4月から2015年3月まで出雲市立総合医療センターにて経鼻上部消化管内視鏡検査を受けた6860名(男性3405名、女性3455名、平均年齢55.6歳)を対象とした。内視鏡検査は外径の異なる2種類(5.5mm, 5.9mm)を使用し、検査前の前処置は全例同じ方法で行い、内視鏡抜去時に鼻出血の有無を評価した。

その結果、鼻出血率は3.6%(245/6860)で、男性2.3%、女性4.8%と女性に有意に高かった。内視鏡外径の大きさでは鼻出血率に差はなく、平均年齢は鼻出血を認めた群(49.3歳)が認めなかった群(55.8歳)に比べ有意に低かった。抗血栓療法を受けている患者の割合は3.4%(233/6860)で、鼻出血率は抗血栓療法を受けている群(3.0%)と受けていない群(3.6%)の間に有意差はなかった。多変量解析の結果、女性と65歳以下の若年者が鼻出血を起こす有意な因子であることが判明した。今回の結果から、鼻出血は若年者や女性に多く、抗血栓療法は鼻出血を来す危険因子とはならなかった。

本研究は、国内外の経鼻上部消化管内視鏡検査の普及に多大なる貢献をする有意義な研究である。